

現代と 十字架のヨハネ

カルメル会編著



若き日のヨハネ・パウロ二世と十字架の聖ヨハネ

関口 時正

今から五〇年前、一九四二年の一月。ナチス・ドイツに占領されたポーランド——古都クラクフで、十字架の聖ヨハネ生誕四〇〇年祭が行なわれていた。

この催しに参加したカロール・ヴォイティワは当時二二歳、化学工場のボイラー用水浄化工程で働く労働者であった。といっても、労働者が表向けの顔であるとすれば、裏の顔は、閉鎖されたのちも地下に潜って教育を続けていたヤギェウォ大学に通う学生、あるいはやはり地下活動をする小劇場「テアトル・ラブソディチネ」の団員であった。

一九四二年は、ヴォイティワ転機の年である。

この年、聖職への志を固めたヴォイティワは、文学部から神学部へと移籍した。一月二二日―二三日の十字架のヨハネ生誕四〇〇年祭には、なりたての神学部生として参加し

たのである。それもおさなりの参加ではない。彼は、跣足カルメル会に入ることを真剣に考えていたのだった。

ヴォイティワは、この頃親しく知ることとなった管区長ユゼフ・プルスに、入会したいという希望を秘密裡に打ち明けている。しかし折しも戦争はたけなわ、チェルナ村（クラクフの西方三〇キロあまり）にあった修練所も閉鎖されており、健康な青年を工場から連れ出すことも難しいとあって、戦争が終わるまで待つように言われる。

占領下のポーランドでは、神学校もまた「非合法化」されていた。当時のアダム・サピエハ首都大司教は、危険を恐れずに地下神学校を組織したが、ヴォイティワは大学とこのセミナリオの両方に属して勉強を続ける。

そして戦争が終わり、親友レオナルト・コヴァルフカ神父が、跣足カルメル会修練所の長となるに及んで、ヴォイティワはチェルナにおもむき、ふたたび修道士を志願する。

ところが、神学校から修道会に移るには、教区長の同意が必要である。興味深いことには、アダム・サピエハはその許可を与えなかった。サピエハに「先見の明」があったというべきかどうかは、わからないところである。

こうして修道生活を送るといふ望みは、そのたびごとに何らかの「障害」がはたらいて実現せずにおわるが、跣足カルメル会との交流はその後も長くつづく。

これより二年前、カロール・ヴォイティワは、とある俗間の聖者に出会っている。

自身「聖職を選んだことについて言えば、私は、亡きヤン・ティラノフスキにきわめて多くを負っている」と書き、また友人とのお喋りの中「ある猫背の洋裁師」と呼んだ、この人こそ、ヴォイティワを十字架の聖ヨハネへと導いた恩師だった。

ヤン・ティラノフスキ（一九〇〇〜四七）について、おもてだった記録はほとんどない（一九四九年、まだ若いヴォイティワが書き残した「使徒」というエッセイが、もともと長いものではないだろうか）。それも当然で、ティラノフスキは、修道会に入ることもなく、書き物をするでもなく、公衆を前に説教をするのでもなく、一生を一介の職人として過ごした人物だった。

ヤンがしていた、唯一活動らしきものといえば、「生けるロザリオ」と称するグループの中で、主に地域の若者たちと語り合うことだった。たまたまごく近所に住み、そうした

仲間まじってヤンに接したヴォイティワは、この人物の裡に「本当に聖なるなんびとか」を見出す。

町中にありながら、つましく静かに、極度に禁欲的な、観想と克己の生活を送る隠者——これが、われわれに与えられたヤン・ティラノフスキのイメージである。

以下、ヴォイティワの回想「使徒」から、いくらか引用しておきたい。

彼の生き方は、私達にとっては全く未知の生き方であっただけに、ヤンへの私達の道も、それだけ困難なものだった。

彼は、司祭の説教や書物より、はるかにじかに神を指し示していたのである。彼は、神については単に知ることができるばかりでなく、神を生きていることができるということを実証していた。

ヤンの中には、この人は恩寵のプロセスそのものを体現している——そう思わせる何

かがあった。繰り返すが、その既成事実が、私達には驚異だったのである。

しかしヤンの伝道は、大規模なものではなかった。個人的な会話でも、集まりにおいても、彼は、講じることなく、教えることなく、ただ自らの内面生活の、その重さのよくなるものによって、すべてを成し遂げていた。

どのように、そうした努力が（それは時に一日四時間の観想に及んだ）彼をこの可触の現実の外へ導いていたのか、そこで、どのようにして不測、不可解の神の現実と出会っていたのか——すでにこれは、永久に彼だけの秘密である。彼に接した者にも、それはひとえに結果から、果実から判断することが許されるだけなのであった。

神の偉大さ、神の美しさ、神の超越を伝道する使徒。彼は、このことを自分にとっての第一の案内人、すなわち十字架の聖ヨハネから学んだのだった。神がわれわれの内にあるのは、われわれが神をわれわれ人間の精神の狭い限界にまで狭めてしまったためでは

ない。神は、自らの超自然的な超越の方へ、われわれをわれわれ自身から引きはなさんがために、われらの内にいたまうのである。ヤンがめざして努力した第一の目標もそれであった。

内面生活においては、ヤンは初めセメネンコ神父〔ピョートル・セメネンコ・一八一四〜一八八六〕の『ミスティカ』に拠っていた。だがやがて、十字架の聖ヨハネとイエズスの聖テレジアが彼の第一の師となる。そして彼らはヤンにとって師となつたばかりでなく、文字どおり彼をして彼自身を発見させ、彼の人生を説き明かし、その根拠を与えたのである。

こうして、二〇歳のカロール・ヴォイティワは、ヤン・ティラノフスキを通じて十字架の聖ヨハネを知った。そしてヨハネの原文を読むために、熱心にスペイン語を学ぶようになる。

後に留学先のローマで博士論文（『十字架の聖ヨハネにおける信仰の問題』一九四七）

にまとめられることになる主題は、すでに一九四五年、神学部のイグナツィ・ルジツキ神父（博士）のセミナーで書いた、「十字架の聖ヨハネにおける信仰」という小論文となつて現われていた。

言ってみれば、ヴォイティワは、その青春の時代をほとんど十字架のヨハネのしるしのもとに過ごしたのだった。しかも、興味深いことに、彼とヨハネとの親密な交流はそうした論文よりなよりも、まず「詩」という形で表現されることになったのである。

一九四六年から翌年にわたって、カルメル会の雑誌『カルメルの声』に一篇の奇妙な、長く、難解な詩が掲載された。『隠れたる神に寄せる歌』と題され、作者の名前はなかった。

この詩こそ、カロール・ヴォイティワが、やがて夥しい著述をすることになるその生涯で初めて印刷に付した作物であった。そして末尾には一九四四年という日付が打たれてあり、これが、まだ終戦前のものであることを物語っている。

実は、当初は「神学生カロール・ヴォイティワ」と筆者名が印刷され、製本される予定に

なっていたのであるが、これは編集にあたったヴォジニツキ神父が、当時神学生はどこにも公には書いてはいけないというきまりがあるのを知らなかったためで、ヴォイティワはヴォジニツキに懇願し、急遽紙をさし換えて印刷してもらったという経緯がある。

『隠れたる神に寄せる歌』は四五〇行ほどの長い詩であるが、どこにも十字架の聖ヨハネへの言及や、これといつてわかるような用語の借用は見られない。言葉遣い自体はきわめて現代的なものである。にもかかわらず、全編が、深いところでヨハネの教えに繋がっているのである。その繋がりは、跣足カルメル会の人々や、特に日頃からこの教会博士の著作に親しんでいるものでなければ、到底見えない性質のもだった。題名の「隠れた神」という言葉ですら、いくらポーランド人にカトリック信者が多いとはいえ、かならずしも一般になじみのあるものでもないのである。

読者にとって十字架の聖ヨハネが比較的連想しやすい形で現われているのは次のような箇所だろうか。

何も見えないのに、こんなにも見えるわけは？

もう水平線の向こうに最後の鳥が墜ちた時

波が ガラスの中に鳥をかくまった時——僕はもっと下へ落ちていった
冷えびえとしたガラスの流れに 鳥と一緒に身を浸し。

目を凝らせば凝らすほど、それだけ見えなくなり

太陽の上に傾けられた水の運ぶ 反映もそれだけ近い。

水を太陽から隔てる影の 遠ければ遠いほど

太陽から僕のいのちを隔てる 影の遠ければ遠いほど。

つまり闇の中にも、これだけの光、

開いた薔薇にあるいのちほどの、

魂のへりに

降り来る神ほどの光。

(傍点閉口)

「神に達しようと思うならば、理解しようと思うよりも、むしろ理解しないようにすべきであり、よりいっそうの神の光に近づくためには、目を開いているよりも、むしろ盲となり闇にとどまるべきである」（『カルメル山登攀』Ⅱ―8―5）。「明瞭にわからなければわからないほど、人は神に近づくのである。事実、預言者ダヴィッドは「神は闇をおおいとなさった」（詩篇17―12）といっている。それで、神に近づくとき、あなたはあなたの目の弱さのゆえに、いきおい闇を感じるはずである」（『霊の賛歌』1―12）……というような十字架のヨハネの言葉が、これらの詩行を裏打ちしていることは明らかである。あるいはまた、こういう詩句がある――

無辺の永遠を豊かに宿す 奇妙な死

その死に満ちる一瞬と、

また奥深い庭を 気絶させる

遠い熱の接触と。

この「奇妙な死」とは、もちろん自然の死ではなく、神との接触の中で、魂が自分の全ての人的機能を忘れ、棄て去る、つかのまの無の状態、あるいはまだ地上に生きながら霊的に死ぬことを指している。十字架のヨハネはこう語る――

われ我の裡にさながら死にゆけり

汝の裡に命得て

（『バビロン河のほとりに』6）

神そのものでないあらゆるものにたいして、魂は、いわば死にゆく

（『暗夜』Ⅱ―13―11）

それではその先の「奥深い庭を 気絶させる 遠い熱の接触」とは何だろうか。

『霊の賛歌』第一七歌では、「吹け、愛を目ぎます南風よ／私の庭を通して吹いて」と歌われ、次のように説かれる――

この庭とは靈魂自身のことである。(…)ここで注意すべきは、花よめが私の庭のなかを吹いてとはいわずに、私の庭を通して吹いてくださいといっていることである。なぜなら靈魂のうちで神が息吹くのと、靈魂を通して息吹くものには大きな相違があるから。靈魂を通して息吹くとは、靈魂にすでに与えられている徳や完徳に触れて、それらのうちに動きを生ぜしめることで、このようにしてこれらの徳を更新し活動させ、すばらしい芳香と甘美を靈魂のうちにただよわせるのである。

つまり、神との一致を願う魂を「庭」に、神の愛すなわち息吹を南風(アウストロ)に喩えているのだが、一方、神の愛の十階梯の第一段において、魂が「氣を失う」ということも説かれる(たとえば『暗夜』II-19-1参照)。

さらにヴォイティワの詩の「熱の接触」という表現については、十字架のヨハネの「愛の生ける炎」を思い起すべきだろう――

ああ愛の生ける炎よ

その熱の力の何と優しく傷つけることか

(……)

ああいとしい手　ああ優しい接触

そこに永遠の生の予感が

(……)

死によって全き生へとみちびく

(『愛の生ける炎』I-11)

〈その熱の力の何と優しく傷つけることか〉

七　すなわち――あなたがその熱でわたしに触れることの何という優しさ。この炎は神の生の炎であり、その生の優しさでそれほど、深く傷つくあまりに、靈魂は愛のうち溶けてしまうほどである。

(『愛の生ける炎』I-7)

あるいはまた、『靈の賛歌』では「神は、ときとして、ある種のひそやかな愛の接触をなさることがある。それは、火の矢のように靈魂を傷つけ貫き、愛の火ですっかり焼灼し

てしまう」(1-17)と言われるように、ヴォイティワの「熱の接触」は、神の息吹の謂いなのである。

こうしてみると、先の四行の詩句では、靈魂という言葉も神という言葉も隠されてはいるが、まぎれもなく、そして正確に十字架のヨハネのテクストを踏まえた表現だということとがわかるはずである。

それではこれが、ヴォイティワの文学的遊戯だったかといえはそうではなく、原文を味読するならば、やはりまぎれもなく現実の作者の心象と精神の活動を伝えたものなのである。

神との出会い、一致に憧れ、日々厳しく身を処しながらも、やはり「自分の過ちやすい思考」に支配され、「存在に圧倒され、自分の無を忘れ、もっとも単純な光線からはぐれては、遠い光線の中をさまよう」若いヴォイティワの精神の運動、そして詠嘆、それが全編を貫く、真摯な「歌」なのである。

僕はゆっくりと 言葉から輝きを奪う

影の群れにも似た 思念を逐い払う

——創造の日を待つ 無

僕は何もかもをそれで満たす ゆっくりと

障害となる「感覚」を否定し、自己の「知性」のはからいを却けることが、どれだけ難しいことであるかを——「目を凝らせば凝らすほど それだけ見えなくなり」——ヴォイティワは歌う。

しかし、まれには幸せな瞬間、あるいは予感も訪れるのである——

一瞬と永遠が混じりあい

水滴は海を抱いた——

日の光まばゆい静けさが

この氾濫の深みへおりてゆく

というような「水滴が海を抱く瞬間」、あるいは、

とその時——隠れた輝きのなかで

僕は自分のすべてを集中し

もう一度へあなたの思考へになる

〈麵麩^{はん}〉の白い熱に愛されて。

というような「へあなたの思考へになる瞬間」が、どれだけあり得たものだろうか。

後になって、一九七三年のこと、クラクフはコペルニクス通りにある女子蹴足カルメル会修道院の修道女たちが、当時枢機卿のカロル・ヴォイティワと会った時、（おそらくはお茶目のつもりで）この『隠れたる神に寄せる歌』の一部を朗読してみた。すると、ヴォイティワは、（おそらくは笑って手を振りながら）朗読をさえぎって、「そう。私の作品だ。しかし、今時、そんな静けさに満ちた岸辺なんていうものがどこにあるかね？」

と答えたという挿話がある。

これは、この詩が、

遠い静けさの岸辺は 敷居のすぐ外からもうはじまっている
けれども君は 鳥のようにあちらへはばたいては行けない。

という風に始まっているからなのだが、「そんなくはどこにあるかね？」というポランド語はまた、「つまらんものだよ」という意味も含むイデオムだった。

ヴォイティワが教皇に選出されるまで、一部の人を除いて、彼が詩を書いていることは誰も知らなかったし、彼もまた発表するときは常に筆名を用いていた。修道女たちの、「こんなものを見つけましたよ」という「挑発」に、彼は「つまらんものだよ」とお茶を濁したが、実のところ、彼はその頃も、その後もまだ詩は書きつづけているのである。

十字架の聖ヨハネの仕事の中でも、その「歌（カンティコ）」は特別な重み、意味を荷なっている。そしてヨハネ・パウロ二世もまた、その表現を、ヨハネに相和する「歌（ピ

エシン」によって始めた。

このことは、かならずしも一般に知れわたった事実ではないだろう。しかしそれだけに、あらためてよく考えてみる価値があるかもしれないことなのである。

現代と十字架のヨハネ

1991年11月14日 初版発行

©編者 男子跣足カルメル修道会
代表役員 奥村一郎

発行所 聖母の騎士社
850 長崎市本河内町196
TEL 0958-24-2080
FAX 0958-23-5340
